

教団新報

定 価 1 部 140 円 (本 体 133 円 千 共 200 円)
予 約 購 読 料 1 年 分 千 共 5,000 円
紙 代 の み 3,500 円
振 替 00140-9-145275
本 紙 を 購 読 希 望 の 方 は 、 前 金 を
そ へ て 、 お 近 く の キ リ ス ト 教 書 店
へ お 申 し 込 み 下 さ い 。
教 会 の 購 読 料 は 負 担 金 に 含 ま ず 。

発 行 所 日 本 基 督 教 団
169-0051 東 京 都 新 宿 区 西 早 稲 田 2-3-18
日 本 キ リ ス ト 教 会 館 内 電 話 03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発 行 人 内 藤 留 幸
編 集 主 筆 竹 澤 知 代 志
印 刷 所 株 式 会 社 き か ん し



石橋秀雄議長による開会の挨拶、延べ 440 名が参加した！

現代日本の危機とキリスト教 東日本大震災を通して問われたこと

信仰者としてどう受け止め、

何を語るべきかを問う

東日本大震災・原発事故を信仰者としてどう受け止め、何を語るべきかを問う教団主催の緊急シンポジウムが 8 月 29・30 両日、銀座教会で開催された。「現代日本の危機とキリスト教―東日本大震災を通して問われたこと」を主題に、4 人が発題、大木英夫・聖学院大学大学院長が特別講演を行い、濃密な、示唆に満ちたシンポジウムに延べ 440 人が熱心に聞き入った。内容は、教団出版局から出版され、内外に発信される。

第 1 日目午後 1 時 30 分からは始まった開会礼拝で、北紀吉牧師(愛宕町)は、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と題する説教で、「神は死んだという人々がいるが、人々は神を乞い求めている。神を語らざるを得ない時代であり、教会はそのことを問われている。被災地に行って、夜、絶望のうめきを聞いた。闇の中に助けを求める叫び、うめきが脳裏から離れない。絶

望のただ中に十字架のイエスが立っていて下さる。そこに救いがある。教会が語らねばならない」と熱く説いた。続いて、石橋秀雄議長は、「死者・行方不明は 2 万人に上る。1 人の命にどれほどの命が繋がっていたか、絶望の中にどれほどの人がいるかを思う。3 月 11 日、

私は東神大卒業式に出席中、大震災に遭遇し、2 日後、『後ろから押される思』で被災地を訪問した。『神から迫られていた』のだと思う」と開会挨拶を行った。

1 日目、まず中山昇氏(清教学園元理事長)が、「キリスト教学校の視点から」発題を行い、戦後、大震災襲の瓦礫の中から、教会学

校生徒の訴えを教会が受け止めて、学園設立に至った経緯を説明して、大きな示唆を与えた。続いて、芳賀力氏(東神大教授)が「神学者の視点から」「なぜ神は『悲しみの人』になられたのか」と題して発題。昔から世界には不条理なことが多くあったが、私たちが意識しなかった。危機に遭遇した時こ

施設の再建はすぐには決まらな。募金は貯めておいて欲しい」と述べた。2 日目は、午前 10 時から岡本知之副議長(西宮)が、「教会・牧師の視点から」「現代日本の危機とキリスト教」と題して発題。原発 24 キロ地点の原町教会に震災 1 カ月後、朴貞蓮牧師が韓国・済州島から着任したが、外国では、日本より遙かに正確に事故の実態が報道されていた。

保育所の園児 100 名が避難所で何らかの変調を来しており、困難の中で礼拝を守っている状況を報告。内外で神の存在を否定する発言が相次いでいることを紹介して、教会の使命を強く訴えた。午後は、大木英夫氏(聖

学院大学大学院長)が「土曜日のキリスト」と題して 2 時間の特別講演を行った。大木氏は、3・11 以後、日本は神から「改革を迫られている」として、「日本のプロテスタントが何故か、うも軽くなったのか」と警鐘を鳴らした。金曜日の十字架から日曜日の復活に至る土曜日、日本はその土曜日にいる」として、仏教の「生老病死」の永遠回帰ではない「古い人から新しい人への奇跡的転回」洗礼こそ、人間の究極の転換、前進があると説いた。

グローバリゼーションの風潮に触れ、世界は教会に成りたがっている。だから教会は教会に成らなければならぬ」と締めくくって、(永井清陽報)

特別講演

「土曜日のキリスト」

大木英夫氏(聖学院大学大学院長)による特別講演が 2 日目午後に行なわれた。2 時間のプログラムは、1 時間強を講演に、残りを質問、意見に答えることに用いられた。

大木氏の故郷は、今、「フクシマ」と呼ばれる。会津・喜多方、小学生のとき川越しに写生した教会堂に、氏が初めて入った経験を語る

だった教会に自身が引き入れられることで、後に知ることに。J・ウェスレーのアルダスゲートでの心燃える経験と同質のものであった、と言う。

講演本論は、大震災 1 ヶ月後に東洋英和女学院教職員研修会で行われた講演(4 月 23 日付『キリスト新聞』講演要旨掲載)と、新報 4727 号(11 年 7 月 16 日発行)巻頭メッセージを骨子とし、未曾有の危機の

中での迫りを受けた「神に迫られた改革」、土曜日「墓の中に横たわるキリスト」、彼岸と此岸を橋渡し、歴史を貫く「心柱」としてのキ

リストといった鍵となる言葉で語られた。新報メッセージに触れることのできなかったアウグスティヌス『告白』の一節「わたしは、死ぬことのないように、あなたのみ顔を仰ぎ見るために死のう」を取り上げ、告白すること、神の御前にあることの重大さに人間は強情に激しく争ってきた。しかし、「あの十字架の鮮烈さ、それは神が人間に究極の激しさをも

つて争っておられるのではない」とした。我々は震災を外から見ることができない。2 万人もの犠牲者、殉職者たちを

知るときに震災を生き延びた者たちはどうすべきかを考えねばならない。すでにメディアも、教会も「ひたすら忘却に耽っている」と警告する。バーゼル美術館でホルバインの描いた「墓の中に横たわるキリスト」を見たときの衝撃と、罪と死を忘れてしまっている

「安価な恩寵」、日本のプロテスタント・キリスト教の軽薄さを指摘した。エゼキエル書 37 章「枯れ骨の谷」を引き、我々は荒涼たる被災地を前に、神がエゼキエルに問われた「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」と同

じ問いを問われている。神がエゼキエルに告げるのは「お前たちは生き返る」であつた。神が告げたのは「お前たち」であり、わたしたちを大震災の外には立たせないものである。

創造主は救済者である(イザヤ 46・4)。イエスは道である。しかも、生れ、死に、復活し、聖霊を送る「動く道」である。土曜日、墓に横たわるキリストは、死という否定を媒介として生へと、命へと動く。永遠に閉ざされた円環はキリストにおいて開かれたことを指摘する。

「心柱」というスカイツリーに用いられた日本古来の

深い比喩に満ちた講演を終えた。講演後、質問に答えて、『神に迫られた』のは『日本を神学する』ことだ。パルトは、ヨーロッパのある時期に必要なだった。神学について大改革が必要で、外国の神学に頼る時代は終わった。

「日本のキリスト教会は、左右に別れ、教派の勉強ばかりしている。教団の一致というなら、真剣に悔い改めなければならない。キリスト教学校は根本的な改革を必要としている。『教会は主のもの。教会が劇場化しつつあるが、教会で人気取りをしてはいけない』など、示唆に富む刺激的な回答を行った。



大木英夫聖学院大学院長による特別講演

(渡邊義彦報)



稲松義人氏

稲松義人氏（日本キリスト教社会事業同盟理事長）より「キリスト教社会福祉の視点から」と題して、発題がなされた。

まず戦後日本の社会復興が多くの海外援助に支えられた歴史から話し始められた。その中に教会やキリス

ト教に關係した多くの団体がある。東日本大震災での被災教会やキリスト教団体にも海外から多くの献金が送られている。同盟では被災地のニーズを受けてワーカーを派遣し、地元の福祉活動が復興するまでの間、継続的に応援すること

を決めてプロジェクトを設置した。それらの働きを支えるための募金をお願いしている。また救援対策委員として被災地へ

赴き、「実践に立つて議論する意味がある。社会福祉に立つ信仰者として感じたことを述べたい」と語った。

3月11日2時46分、稲松氏は浜松市で日本キリスト教社会事業同盟理事会に出席していた。閉会后、テレビ映像を見ると大津波警報が発令されていた。交通機

関が閉ざされ現地へ行けない状態である。機動力のなさを痛感した。被災地では施設の職員が被災していることを思いながら、支援の仕方について考えた。現地

の立場、生活を共にしながら働く覚悟、使命感のある人々を、祈りを持って送り出す必要がある。それは伝道者を送り出すのと似ている。社会福祉の実践にどれほどの使命感があったかを今回、問われた。

小羊学園理事長でもある氏は、重度の障害を持つ子どもたちと接する中で、人間存在は価値ではなく、その関係の中でとらえてこそ理解できるものであることを学んだと語る。愛のわざに励みつつ（教団信仰告白とは関わりを持ち続けること。神と人、キリストと人、人との関係の中にこそ、生かされている意味、救い、生きていくための指

針が現されている。それは世俗的な価値観をよりどころとしている限り気づかない。

氏は被災孤児等の里親制

2日目朝、4つ目の発題が、岡本知之教団副議長によって行われた。副題は「教会・牧師の視点から」。50分間の持ち時間を目一杯用い、まだまだ語りきれないことがあるという印象のす

中し、発題を補完するかのようになり、答弁した。

内容は、正に主題の通り、「震災を通して問われたこと」であった。発題は、氏の豊富な知識、読書量に基づくものであり、地震・津波から、原発の崩壊、それに伴う放射線被害の拡大について、順序立て、論理立

てて説明し、厳しく東京電力や原子力保安委員会の事故対応を批判した。その一々について、単にマスコミ報道をなぞるのではなく、氏の知識、読書、また現地に赴いての出会い・体験から丁寧に説明し、極めて説得力があった。

一方で、「学者の間でも見

る。日々の生活で出会う悲しみの人と向き合ってほしい。関係に生きてほしい。そのような働きとして、全国教会に里親制度を広め

たい。生きる力が養われるよう、キリストの愛に裏打ちされた里親が増えてほしい。」

（松本のぞみ報）

違和感を生んだのかも知れない。

ところで、氏の発題の重点は、必ずしも事柄の説明ではなく、特に、保守バプテスト同盟・福島第一聖書バプテスト教会と日本基督教団原町教会の事例を上げ、「教会・牧師の視点から」

「震災を通して問われたこと」を鋭く追求することに主眼があり、教会とは何か、信仰とは何かという、本質に迫るものだった。

また、私たち人間の欲望が全てを牽引していた世界が今回うちのめされ、やや消化不良を来したとしても、実に有意義で、刺激的な時間だった。

（新報編集部報）

キリストの愛に裏打ちされて ▼キリスト教社会福祉の視点から

芳賀力教授の発題は、愛する家族を失い慟哭する人々に接した経験から始まった。そして、今回の震災で亡くなった2万人もの人々の死に対して、災害は

繰り返されるということや、その数の多さゆえに鈍感であってはならないと述べた。

次に、宗教学者の山折哲雄氏や寺田寅彦氏の説に触

れて、日本人に「天然の無常」という自然観があることを芳賀氏は指摘した。自然に逆らう代わりに諦め、膝を屈し、むしろそこから自分たちの生活をいかに築

くかを考えていく「天然の無常」という自然観が本来の救いや慰めになるのだから問題提起をなし、次のように答えた。

『人は自分が不条理を経験したときに、世界の破れ目に気づき、世界が救われなければならない存在なのだということを知る。つまり、危機に遭遇した時こそ、

原発事故そのものは天災に起因するが、それに伴って引き起こされたことは人災である。原子力の軍事利用のむごたらしさは広島・長崎が、商業利用の危うさは、チェルノブイリと福島

が、世界に教える教訓になった。

世界は、神からの委託を受けた責任を心に刻んで、根本的に進路変更をしなければなら

が必要であることを明らかにする。なぜなら、我々には主イエス・キリストが示されているからである。

主は、悲嘆にくれる人々に徹底して寄り添うために、自ら「悲しみの人」になられた。

なぜ神は「悲しみの人」になられたのか ▼神学者の視点から

清教学園の目指す人間像は、①神を信じ、誠実に仕える②真理を学び、賜物を生かす③隣人と共に、平和を築く、であり、学校建設は、まさに「神のみ業」だった。

清教学園には駅から学校までの山沿い通学路「しら

かしの径」があり、毎朝、校長が道を登り詰め、たどるで生徒一人一人と挨拶を交わすのが学園の伝統だ。十分用意をしているが、想定外のことがいつ起きるか、人間には知る術もない。最後の抱りどころは神に守られて戴くことだ。

私たちの明日に何が待ち

（永井清陽報）

が、世界に教える教訓になった。

世界は、神からの委託を受けた責任を心に刻んで、根本的に進路変更をしなければなら

が必要であることを明らかにする。なぜなら、我々には主イエス・キリストが示されているからである。

主は、悲嘆にくれる人々に徹底して寄り添うために、自ら「悲しみの人」になられた。

それだけではなく、主は復活し、永遠の命の初穂となつて希望を与えてくださった。さらに、陰府にまで降つて福音を宣教されたのである。身近な愛する死者をキリストの御手に委ねる祈りすることは意味あることであり、まことの慰めとなるものであろう。

（秋葉恭子報）

ように、原発問題に留まらず、文明論に接近するものだった。

最後の部分では、「現代の危機と教会」の中見出しが上げられ、①人間（②ことばのメルトダウンと教会との小見出しが記された。人格、関係概念をキーワードに、現代人の人間性と教会人の信仰に触れるものだった。

限られた時間内に、沢山の話題と情報と、そして主張が込められており、これを、ダイジェストとして紹介することは困難だが、もし、やや消化不良を来したとしても、実に有意義で、刺激的な時間だった。

（新報編集部報）

神が私たちに問いかけておられる

東日本大震災をそれぞれの視点から

教会学校生徒の願いから学校は立ち上がった

▼キリスト教学校の視点から

先日、東日本大震災の被災地を訪れて、大阪空襲直後の光景を想起した。「滅びないものがあるのか」という思いである。

瓦礫の中から立ちあがった清教学園は、大阪の金剛山の麓にある小さな教会、長野基督教会の教会学校の生徒の願いから始まった。「毎日通える中学校を作って欲しい」という子供たちの願いに応えようと、1950年、教会に設立発起人会が設立されて、女性信徒の5、600㎡の土地提供、席上献金と毎月50円の募金を積み重ねて、中学校を設立し、5年後の高校設立に繋がった。

清教学園の目指す人間像は、①神を信じ、誠実に仕える②真理を学び、賜物を生かす③隣人と共に、平和を築く、であり、学校建設は、まさに「神のみ業」だった。

清教学園には駅から学校までの山沿い通学路「しら

私は16年前、阪神大震災に遭遇した。16年前と結び付いている私の記憶は「生かされた私」だった。東日本大震災、付随した原発事故では、「想定外」という言葉がよく使われる。

なぜ神は「悲しみの人」になられたのか

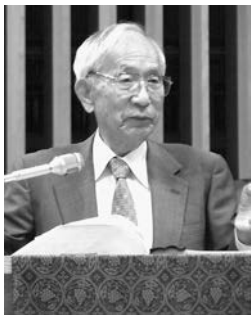
▼神学者の視点から

芳賀力教授の発題は、愛する家族を失い慟哭する人々に接した経験から始まった。そして、今回の震災で亡くなった2万人もの人々の死に対して、災害は

繰り返されるということや、その数の多さゆえに鈍感であってはならないと述べた。

次に、宗教学者の山折哲雄氏や寺田寅彦氏の説に触

れて、日本人に「天然の無常」という自然観があることを芳賀氏は指摘した。自然に逆らう代わりに諦め、膝を屈し、むしろそこから自分たちの生活をいかに築



中山昇氏

人の死と命、救いなどの根源的な問いに目覚める好機でもある。

しかし、科学技術が発達した今日、我々はその世界の破れ目に向き合おうとせず、人間の英知を用いた対症療法で取り繕おうとする。しかし、そのような人間の存在をはるかに超える「より大いなる存在」としての自然があり、その自然よりもはるかに大いなる方、世界を造られた神の存在がある。人間は、その神から、世界を神のぶどう園としてよく世話をしように委託を受けている。

原発事故そのものは天災に起因するが、それに伴って引き起こされたことは人災である。原子力の軍事利用のむごたらしさは広島・長崎が、商業利用の危うさは、チェルノブイリと福島

が、世界に教える教訓になった。

世界は、神からの委託を受けた責任を心に刻んで、根本的に進路変更をしなければなら

が必要であることを明らかにする。なぜなら、我々には主イエス・キリストが示されているからである。

主は、悲嘆にくれる人々に徹底して寄り添うために、自ら「悲しみの人」になられた。

それだけではなく、主は復活し、永遠の命の初穂となつて希望を与えてくださった。さらに、陰府にまで降つて福音を宣教されたのである。身近な愛する死者をキリストの御手に委ねる祈りすることは意味あることであり、まことの慰めとなるものであろう。

（秋葉恭子報）

さらに、共にうめき、執り成しをしてくださる聖霊なる神に言及する。キリストは「他者になりきることの人格（位格）的原理」であり、聖霊は「離れている他者と結び合い、合一化する人格（位格）的原理」である。神は自身の中にこれほどに豊かな他者性と合一性を持っている憐れみの神である。

復旧・復興は長い道のりになる。救援・支援の情熱を持ち続けるには、この憐れみの神を想起させる礼拝に戻って来ればよいでしょう」と、芳賀教授は締めくくった。

（秋葉恭子報）

教区の教憲的位置付け明確に

第 3 回信仰職制委員会



教団と教区との関係を問う諮問に答申

第37総会期の第3回信仰職制委員会が8月22日(月)～23日(火)に、委員7名全員の出席のもと教団会議室で行われた。

今回、以下の一つの諮問に答申が出された。

〔諮問〕

「教団と教区との関係について」(1)：教憲第6条に「本教団はその教会的機能および教務を遂行するために教区を置く」とありますが、教団が教区を「置く」ということによって、教団と教区とのどのような

関係の規定しているか。理解すべきでしょうか。

〔答申〕

教憲第1条には「本教団はイエス・キリストを首と仰ぐ公同教会であって、主の体たる公同教会の権能を行使し、…」とあり、教団が教会であると規定されており、また、教憲第7条には「教会の教会的機能および教務は」とあって、各個教会が教会であると規定されています。

他方、教区については、教憲第6条に「本教団はその教会的機能および教務を遂行するために教区を置く。教区は本教団所属教会の地域的共同体」とあり、教区は教会ではなく、教団が「教会的機能および教務を遂行するため」の「地域

についてコース・科目認定、受験志願者の受験資格審査、他教派からの転入志願者1名、復帰志願者1名の審査を行った。

提出物(釈義・説教、組職神学論文、神学論文、牧会学)の採点結果を突合せ、合否判定、再提出等をそれぞれ確定した。また、学科試験問題を委員全員で検討し、決定した。

さらに、受験志願者の受験費用に関して、18件の援助申請について確認し、合計359,600円の支出を決定。

面接のあり方について協議し、「試験」としての位置づけを明確にして実施することを決定した。従来、面接の冒頭で合否結果を告げていたが、これを改め、

関係の規定しているか。理解すべきでしょうか。

〔答申〕

教憲第1条には「本教団はイエス・キリストを首と仰ぐ公同教会であって、主の体たる公同教会の権能を行使し、…」とあり、教団が教会であると規定されており、また、教憲第7条には「教会の教会的機能および教務は」とあって、各個教会が教会であると規定されています。

他方、教区については、教憲第6条に「本教団はその教会的機能および教務を遂行するために教区を置く。教区は本教団所属教会の地域的共同体」とあり、教区は教会ではなく、教団が「教会的機能および教務を遂行するため」の「地域

関係の規定しているか。理解すべきでしょうか。

〔答申〕

教憲第1条には「本教団はイエス・キリストを首と仰ぐ公同教会であって、主の体たる公同教会の権能を行使し、…」とあり、教団が教会であると規定されており、また、教憲第7条には「教会の教会的機能および教務は」とあって、各個教会が教会であると規定されています。

他方、教区については、教憲第6条に「本教団はその教会的機能および教務を遂行するために教区を置く。教区は本教団所属教会の地域的共同体」とあり、教区は教会ではなく、教団が「教会的機能および教務を遂行するため」の「地域

面接終了後、受験者に一度退出してもらい、委員会で面接を含めて合否を協議決定した後、再度入室してもらう形で結果を伝える形とする。全体会において説明することを申し合わせた。

(渡部和使報)

宮島新也氏(隠退教師)

11年6月12日逝去、74歳。東京都に生まれる。62年青山学院大学を卒業、64年相良教会に赴任、88年より'89年まで吾嬭教会を牧会し、'99年隠退した。遺族は妻・宮島園子さん。

教団年鑑係からのお知らせ

『教団年鑑2011』の追録が出ました。第37総会期の教団三役、常議員会、各委員会、新設委員会、および2011年5月以降の各教区三役の名簿が主な内容となっています。ご希望の方は年鑑をお求めになった書店または教団事務局まで直接お申し込み下さい。

日本基督教団事務局総務部(〒169-0005 1東京都新宿区西早稲田2-1-18、TEL 03-1320-10541、FAX 03-1320-713918、e-mail somu-b@ncj.org)

9月11日2時46分 大船渡教会

911246 この日とこの時間に共に祈りを

…主の慰めと助けを求める祈りと礼拝のとき…

911246、あの日あの時から半年。全てが揺さぶられ飲み込まれ、混沌そのものとされた311246の「あの時」と比べれば、目に見える光景はたしかに様変わりしつつある。しかし、大震災を何らかのかたちで経験した者の多くは、あの時を思い起こせば、おそらく足がすくみ、胸が締め付けられるに違いない。あれから半年の月日は、長いのか短いのか。まだ悲しみと嘆きの声はやまず、明日のことを思えば、不安と恐れに包まれ、何の展望も開けない人は少なくないだろう。信仰者といえど、まだ整理がつかず、11246の祈りの時ごとに、「なぜ」という問いがまた頭をもたげる。

しかし、その問いを抱えながらも主の御前でこの時を過ごそう

と、「911246 この日とこの時間に共に祈りを」と石橋秀雄教団総会議長が呼びかけ、この大船渡教会に、祈り礼拝する人々が集まった。

まず、午後2時46分、記念礼拝に先立って、教団の救援対策本部担当の加藤誠幹事の司会・奨励により「祈りの時」がもたれた。マタイ福音書6章の「思い悩むな。空の鳥、野の花を見なさい」との主イエスの言葉を読みながら、祈りを合わせた。大船渡教会と地区から参加した諸教会の信徒らの祈りと主の祈りによって、主の御前に心が一つにされていた。

祈りの時が終わった頃、湯沢教会で主日礼拝説教の奉仕をした石橋教団議長が駆けつけ、午後3時30分から記念礼拝が始められた。説教は、江刺教会牧師の呂原宗男、奥羽教区総会議長。ただ主の助けが」と題し、イザヤ書49章7-9節からみ言葉を聴いた。「わたしは恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた」と主は言われる。主の「答え」と「助け」はどのように現されたのか。呂原牧師は、まずあの日あの時以降の出来事を振り返る。行方や安否を問いつつ、様々なかたちで救援活動に走った。どの教会の信徒も牧師も同様だったかもしれない。人それぞれ、声を掛け合い助け合った。そうした日々を思い起こす。まさにこのような多くの人々の、また私たちの様々な働きを通して、主は答え、助けてくださったと、呂原牧師は語った。

一般的にはむしろ、「神は何も答えず、何の助けも与えない」と



礼拝後の茶話会にて

911246、もう半年、しかしまだ半年。復興と再建の道は遙かだが、主の答えを聞き主の助けを見ながら前に進もうと、心を新たにされた「恵みの時」だった。

(藤盛勇紀報)

